

# 日本獣医師会創立60周年にあたって



社団法人 日本獣医師会

会長 山根 義久

社団法人日本獣医師会が昭和23年11月9日に設立され、このたび晴れて創立60周年を迎えられますこと、これも偏に関係省庁、国会の先生方をはじめ、獣医界各層関係者の皆様のご指導とお力添え、そして会員各位のご支援とご協力あつてのことと、ここに深甚なる謝意を申し上げます。

さて、平成10年11月25日に明治記念館において創立50周年記念式典を開催いたしましたから、早や10年が経過いたしました。思い起こしますと、この10年の間には人々の安心を脅かす様々な出来事がありました。その中でも、特に新興感染症や再興感染症など多くの感染症に悩まされるとともに、食の安全に対する国民の信頼が根底から揺るがされた10年ではなかったでしょうか。

国内では、実に92年ぶりに宮崎県と北海道で発生した口蹄疫をはじめとして、国際社会経済のグローバル化の中で突如として発生したSARSや、現在もアジア地域を中心に猛威を振るう高病原性鳥インフルエンザ。また、海外での感染とは言え、わが国での狂犬病の発症・死亡事例等々、これまで我々現代人が慢心していた感染症対策に改めて警鐘を打ち鳴らしました。

そして、特にBSEの発生につきましては、食の安全・安心に対する国民の意識を大きく変化させ、さらにその後の度重なる食品偽装問題等もあり、わが国における「食の安全確保対策のあり方」を抜本的に見つめ直すきっかけともなりました。

一方、人と動物の共生社会の構築が国民的課題とされ、イヌやネコなどの家庭動物が伴侶動物として広く一般家庭、さらには人の介護・福祉分野、学校教育分野への社会参加が進展する中で、小動物に対する動物医療提供体制の整備が社会的要請となってきております。

これらの感染症対策や食の安全対策、産業動物や小動物の臨床、さらに自然環境保全対策や動物福祉対策には多くの獣医師が第一線で深く関わっておりますが、この10年のうちに獣医師が背負う職責は一段と重みを増し、獣医師を取り巻く環境が様変わりしてきたことを、身に沁みて感じる次第であります。

現在、私ども獣医師及び獣医師会の周囲には、積年の課題としての獣医学教育の質の確保に向けての体制整備をはじめ、獣医師の需給対策や処遇の問題、動物看護職のパラメディカル専門資格制度化への対応や、獣医師職業倫理の向上等、解決すべき種々の、そして困難な問題が山積しております。

---

それらは、獣医師及び動物医療の提供体制の質の確保に向けての社会的要請に応える上で、決して避けては通れない重要な問題であります。しかしながら、これらの課題を丁寧に、かつ確実に解決していくことは決して容易なことではありません。

獣医師個々の力や地方獣医師会、獣医師会連合会はもちろんのこと、組織の力のみならず、関連団体や業界・企業の力、さらには関係する省庁のお力添えをいただき、時には国会の先生方のご理解とご指導を我々獣医師にお貸しいたきながら、獣医師は獣医師会の下で一致団結して対応努力する必要があります。また、これらの課題を解決の方向に導くためには、まずもって国民の理解と協力を得ることが何よりも重要であります。

獣医師がより一層国民の理解をいただき、そして社会の認知を得るため、獣医師の存在と熱い思いを国民や行政にいかにアピールして、そしてそのアピールをいかに継続して行くかが重要であります。全国55の社団法人都道府県・政令市獣医師会の獣医師専門職により組織される日本獣医師会が、社会に対して声を発し続けることにより、少しずつではありますが国民の支持の下に、当局のご理解をいただきながら制度的な課題の対応が進められてきたところであります。

今後とも獣医師が社会的地位の向上を目指していくためにも、今まで以上に獣医師全員が「専門職業人としての誇りを持ち、獣医学術の振興、獣医事の向上等をはじめとする各般の公益活動を通じ社会に貢献していく」、その姿勢を強く持ち続けていかなければならないと強く感じます。

日本獣医師会では、平成11年に「インフォームド・コンセント徹底宣言」をリリースするなどいたしました。また、昨年からは国際的な「世界獣医師の日」の催しにも呼応して、「動物感謝デー in JAPAN」を開催することにより、広く国民に獣医師の存在とその活動や重要性をアピールすることといたしました。

『獣医師に対する国民の理解を得なければ、何も変わらない。』このことを胸に強く抱きながら、我々獣医師一人一人が新たな気持ちで次の時代を迎えることを希望します。

そして、最後に、これからも日本獣医師会に対する皆様方の各般のご理解とご協力をお願い申し上げます。私の挨拶といたします。